

---

# 青い果実

朱夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青い果実

### 【Nコード】

N3396Y

### 【作者名】

朱夜

### 【あらすじ】

中学の卒業式の日に関親を交通事故で亡くした柏木結衣、お互いに結婚を反対されていた結衣の両親、結衣は進学が決定していたにもかかわらず、学費が高いと言う理由で進学できず、狭いアパートで一人、バイト通いの毎日を送っていた。そんなある日、バイト先からの休日出勤を頼まれ結衣は出勤する、終わりがけにやってきた女性に「私は貴女を知っているわ」と言われ、結衣は女性の家へと居候することになったのだ。

この小説は多分にエロ要素を含みますので閲覧には十分ご注意ください。

## 第1話 私は貴女を知っている

中学の卒業式、両親が交通事故で死んだ。

お互いの親に結婚を反対されていた両親は親戚もおらず、当然私も会った事はない。

高校進学が決まっていた私だったけど、学費が高すぎて結局バイト生活、狭いアパートで毎日静かに暮らしている。

ピリリリリ

携帯が鳴っている、中学入学時に両親に買ってもらったお気に入り  
の赤い携帯。

携帯を開くと着信画面になっている。

【バイト先】

「もしもし?」

『結衣ちゃん? 休みのところ悪いんだけど今日出てもらえないかな? 田幡さんが風邪ひいちゃって』

「わかりました、少し遅れますけど良いですか?」

『うん、6時までに来てくれればいいから』

そう言って電話は切られた。

私のバイト先は商店街の隅っこにある3階建てのビルの最上階のバ

ーだ。

こじんまりとしてお客さんは常連ばかり、働いている人も年齢が高く、話しが合わないし正直居づらい。

しかし、今のご時世アルバイトも中々雇ってもらえず、兄弟のいない私には養ってくれる人すらないのだ。

午後6時前、アルバイト先のバー「月夜」に到着、狭いロッカールームで着替えると私はカウンターに出た。

「結衣ちゃん今日休みじゃないの？」

常連のお客さんが声をかけてくる。

「田幡さんが風邪なので私が代理で入ったんです」

「そうなんだ、大変だね、スコッチのジョニーウォーカー赤ラベルをストレートで頼むよ」

「かしこまりました、少々お待ちください」

私は小ぶりなグラスにお酒を注ぎ、チエイサーを作って出す。

「お待たせしました、スコッチのジョニーウォーカー赤になります」

「ありがとうございます」

常連のお客さんはそういつて静かにお酒を飲み、ポケットから煙草を出した。

バイトの時間も残り1時間となり、私は帰って行ったお客さんのグラスを下げ、吹いていた。

カランカラン

バーの扉が開き、お客さんが入ってくる。

「いらっしゃいませ」

「どう、いいかしら？」

店に入ってきたのは20代半ばの女性だった。

仕事帰りなのか、スーツ姿だが、とても似合っている。

「はい、どうぞ」

席に座ったのは多分初めてのお客さんだ、店の雰囲気を目で追っている。

しばらくしてメニューを開いた。

すごく綺麗な人だ、こんなに綺麗な人がいるんだ、と思わず私は見入ってしまった。

すると、目があった。

「私の顔になにかついてる？」

見つめられていたことに気が付いていたのか、そう問いかけてくる女性に私は「ああ、声も綺麗ななあ」とか妄想気味に頭の中でつぶやく。

そして焦って返事をする。

「あ、いえ、綺麗だったので、つい……あ」

「ありがと、ねえ、私こういうお店って初めてなの、何かオススメある？」

上手く話しをそらしてくれたおかげで私はすぐに対応することができた。

「あ、はい、大丈夫ですよ、お酒は強いほうですか？」

「うーん、あんまり飲んだことはないけど、酔ったことはないかな、いつもチューハイやビールだけ」

「でしたらこちらはいかがでしょう？　こちらが甘口でこちらが辛口となっております」

「んー、じゃあ、こっちで」

そう言っただけで女性は甘口のほうを指さす。

「かしこまりました、少々お待ちください」

女性が指をさしたのはカミア・ミルクだ。甘口でアルコール度数も8度以下と低い。

「お待たせしました、カミア・ミルクになります」

「いい色ね、おいしそう」

「ありがとうございます、じゅっくりどうぞ」

そう言っつて私はお勘定を待っていたお客さんへと近づく。

気が付けばお客さんは女性一人になっており、何故か店もオーナーと私一人だった。

もう一人は先に上がったみたいだ。

「貴女高校生？」

「学校は行ってないんです、いろいろあって」

「そう、大変ね」

すこしだけ、私は頭にきた、何も知らないのに、聞くだけ聞いてそっけない態度をとられたことにだ。

「別に大変って訳じゃないです、生活するに困らないお金はありますから」

「でも、その歳だと満足に遊びにいけないんじゃない？」

「遊ぶ友達はいても、時間が合いませんから」

中学時代の友人は学生だ、そのため時間も合わず、遊ぶこともできない。

何なんだろう、この人は、最初は綺麗な人だという印象しかなかったけど、今はすこし嫌いな方向に向かっている。

「結衣ちゃん、上がっていいよ」

時計を見れば午後10時、店じまいはまだただけど未成年の私はこの時間以降は働けない、私は女性に「失礼します」と言い、オーナーに「お疲れ様です」とあいさつをして着替えた。

着替え終わった後、ちらつとカウンターを見たら女性は既にいなかった。

外に出て、少し冷たい風に身を震わせると、ふわりと何かが私を包んだ。

「そんな薄着じゃ風邪引くわよ」

「あれ？ 帰ったんじゃ」

「貴女もいなくなっちゃたし、一人で飲むのもつまらないじゃない？」

それはつまり、これから飲み直すから付き合えと？ 「冗談じゃない

！」  
「あの、私一応みせい「大丈夫、家近いから」え？ あ、ちょっと

言葉を発する暇もなく、結構な力で腕を引っ張られて私は女性の家の方である道へと歩かされる。

「こんな不規則な生活してるんじゃ夜もまともに食べてないんじゃない？ 貴女、結構ひどい顔してるわよ、私の家でご飯食べていきなさい」

そんなことを言う女性に、私は強く腕を振り切って言った。

「何なんですか一体！ 見<sup>み</sup>ず知らずの赤の他人を家に招き入れるなんて、それに、私は……」

言葉が続かなかった、いや、続けられなかった。

私の口は女性の口によって塞がれ、体は壁に強く押し付けられている。

街灯のないこの夜道は人通りも少ないがそれでも数人は通るのだ。

しかし、それも私より頭一つ背の高い女性が前にいると、抱き着いているようにしか見えないだろう。

「んっ……」

カモア・ミルクと香水の匂いが私の鼻に香った。

「私は貴女を知ってるわ、柏木結衣ちゃん」

「な、なんで私の名前」

「とりあえず落ち着いて話しがしたいの、家まできてくれる？」

頷くしかない私、結局私はこの訳の分からない女性の家に向かうことになった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3396y/>

---

青い果実

2011年11月8日04時14分発行